# 戦い、親しさ、使命 (3) すべてを神と共 に

あらゆるスポーツはトレーニ ングを要しますが、そのおか げで人は自らの可能性を広 げ、そのスポーツをより楽し むことができます。信仰生活 も同じです。努力と戦いに よって、神と共に過ごすこと をより〈楽しむ〉ことができ るようになります。その戦い において私たちは一人ではあ りません。主がいつも共にい てくださいます。私たちは主 と共に戦い、挑戦し、成長す るのです。

## 2024/10/11

出発点:神は条件なしで私たちを愛 する

足元だけでなく景色を眺める

戦うことは愛すること

スポーツのように

「あなたはすでに新しい被造物であり、キリストを身にまとっています。この白い衣はあなたのキリスト者としての尊厳のしるしです。あなたがたの言葉と模範に助けられて、その衣を永遠の命に到達するまで汚れなく保ちなさい」「III。古から教会には洗礼を受けた人に白い衣を着せる伝統があります。それはキリスト

と一つになる望み、キリストを私た ちのうちに受け入れる望みを表すも のです[2]。洗礼という言葉そして洗 礼における仕草も同じ現実を表しま す。洗礼という言葉はギリシア語の baptizein(浸す・沈める)という言 葉から来ています。洗礼によって私 たちは、三位一体の命に入り込みま す。水の中に浸されたスポンジのよ うに、自分自身でありながらも周囲 の環境と一体になります。このよう にして、「神の存在と私たちの存在 との相互の交わり」が生じます。 「私たちは父と子と聖霊の三位一体 の神に〈浸った〉存在になります。 それは例えば、二人が一つの肉とな

との相互の交わり」が生じます。 「私たちは父と子と聖霊の三位するは父と子と聖霊のります」を存在になりまれば、二人が一つのそれは例えば、二人がです。それは例えば、ものの現実けたるにして、ですしいら洗礼を受けするにして、ですしからた大切にするそれはいいのなとおり、継続の子よは、聖書にあるととします。自らを試練に向せなるのもりなら、自らを試練に向 けて備えよ。心を引き締めて、耐え 忍べ。災難のときにも、取り乱す な。主に寄りすがり、決して離れる な。そうすれば、豊かな晩年を送る ことになる」(シラ2·1-3)。

# 出発点:神は条件なしで私たちを愛 する

神は何が起ころうとも私たちをあり のままに愛しています。この確信は 内的旅路の出発点です。この確信が なければ私たちは道を間違えていま す。なぜならこの旅路は自力で何か を獲得するためのものでもなけれ ば、誰かに何かを証明するものでも なく、神の愛を味わいながら自由に 生きる道だからです。聖ヨハネは 「わたしたちは、わたしたちに対す る神の愛を知り、また信じていま す」(一ヨハネ4・16) と書き記して います。そして「生活がすっかり変 わるまで、これらの信仰の真理が心 に染み透る必要があります。神は私 たちを愛しているのです」[4]。

同時に神の恵みは人間の努力を無意 味なものにするものではありませ ん。「聖化は神の賜物ですが、人は 受身の態度を保つわけにはいきませ んしい。確かに、恵みによって私た ちの人生は自己の可能性を超える価 値を持つようになりました。しかし 恵みは人間固有のものをキャンセル するわけではありません。私たちは 恵みと共に働き、恵みと共に〈踊 る〉必要があります。私たちの人生 はすべて私たちのものであると同時 にすべて神のものであると言うこと ができます。喜ばしいこと、辛いこ と、想定内のこと、想定外のこと… このような小さな日常的な事柄の一 つひとつは神の恵みと共にありま す。そして徐々に神と私たちの間で 絶え間ない対話が成立するように なっていきます。それが真の内的生 活ですぼる

## 足元だけでなく景色を眺める

山々を駆け巡る自転車競技の選手 は、目前の努力とエネルギーの配分 に集中することの大切さを知ってい ます。それゆえ、多くの場合路面を 見ながら進んで行きます。しかし、 もしそのことにより彼が周囲に広が る景色を楽しむことができないとし たら、それは残念なことです。霊的 な戦いにおいて同様のことが起きることがあります。自分が打ち勝ちたい悪や必要な努力にばかり目が行ってしまうのです。ですから顔を上げ、これまでの歩みのおかげで眺めることができる美しい景色に目を向けることは大切なことです。

「悪に負けることなく、善をもって 悪に勝ちなさい」(ローマ12・ 21)。聖パウロのこの言葉を聖ホセ マリアは「豊富な善で悪を溺れさせ る」

「」と表現しました。
キリスト者 の戦いの本質は「罪と戦うこと」と いうよりは「洗礼によって与えられ た永遠の命を育む努力」という点に あります。例えば、ある時、私たち が他者のために最も良いものをとっ ておいたとしましょう。私たちはこ の行為を「利己主義に対する戦いし または「物事に執着しないためのト レーニング」と否定的な観点から理 解することもできますが、より肯定 的に「心を広げるための戦い」「愛 に成長するための努力」「寛大になるためのトレーニング」と理解することもできます。そしてこれは、より優れた者になるための個人的な野心に基づくものではなく、キリストの心を出発点として、他者のために生きたいという望みから来るものです。

この異なる観点から来るキリスト者 の戦いに対する二様の理解は、生活 をより良いものとするための二様の 決心の仕方と対になっています。

「同じ間違いを繰り返さない」と決いするよりも、顔を上げ、道のを上げ、道のを上げ、道のを上げ、道のを上げ、があるまれているものととのでしたが実り豊かでしたがまります。までは、ではいるでは、多いの場合では、目前の場合では、多いの距離を取り、内省するためにはない。

時間を作り、私たちが心で感じることがお合うことが必要とくのごとがが必要ようのごとががいます。 りますると、なります。心における決心における決心における決心における決心における決にがれたちが私たちが私たちもうにといることにもが行くないることに目が行くでいることに目が行くでいることに目が行くがいる。

#### 戦うことは愛すること

「子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう」(一ヨハネ3·18)。行いによって愛の言葉や約束が反故にされたとき、本当に愛されていると感じる人はいません。イエスはペトロに問いかけました:「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」(ヨハネ21·16)。私たちの一つひとつの行動はこの問いかけに対する応答で

す。オプス・デイ属人区長は言います:「主のこの問いかけに対する、独創性ゆたかな態度と常に受諾する心構えを伴った自由な応答、これがキリスト者の生き方です」 [8]。 自己中心的な心を乗り越える度に、私己中心的な心を乗り越える度に、私たちは言葉ではなく態度と行いによって神への愛を表しているのです。

聖ホセマリアはあるとき、年の終わ りに言いました: 「最後の瞬間まで 愛によって戦うこと、これが私たち の地上における運命であるしょう。愛 によって戦うとは、戦いの外側から 愛の動機を付け加えることではあり ません。「祈りのうちに主と話し 合っているとき、戦いとは〈愛〉の 同義語であることが以前にも増して はっきりと分かったしい。霊的な戦 いは〈勝利すること〉以上に大切で す。なぜなら「戦いを続ける限り、 内的生活は大丈夫だ。主への愛を毎 日の小さな行いにあらわす決意、主

はそれをお望みである」IIIIからです。戦いはその目的によって愛に変化します。「なぜ戦うのか」「誰のために戦うのか」ということを心がけることが大切です。これらの問いかけは戦いに愛という形を与え、戦いを愛に基づいたものとします。

聖人たちの伝記を読むと、霊的戦い のことを「己の限界まで努力する英 雄による戦い」、または「凡人には 乗り越えることが困難な使命と向き 合うこと | であるかのように想像し てしまう恐れがあります。聖人とは 「凡人が真似できないような高度な 業を実現する聖性の〈曲芸師〉 | [12] のように思えてしまいます。しか し、このような理解は聖人の〈秘 訣〉の本質を捉えていません。人生 という旅路において最終的に価値を 持つのは愛、神の賜物である愛徳で す。殉教者についてでさえも同じこ とが言えます。「殉教の偉大さは剛 毅による行いに由来するものではあ りません。そうではなく第一に素晴らしい愛徳による英雄的な行いに由来します。確かに教会の最初の三世紀は勇気と英雄的な剛毅の時代でした。しかしそれ以上に燃え上がる神の愛の時代だったのです」[13]。

ときに、人は安心を過度に求める心 から霊的な戦いや進歩を、体を鍛え るスポーツマンのように、量的な観 点から計測しようとします。確か に、自己改善するための決心を立 て、様々な点においてこれまでの限 界を超越することは重要です。しか し、これらは霊的な進歩を絶対保証 してくれる「しるし」ではありませ ん。聖ホセマリアが言うように、聖 性とは「日毎により難しいことを行 うことにではなく、日毎により愛を 込めて行うこと | ドエネルにあります。霊 的な実りは、難しいことを行うこと によってではなく、私たちに対する 神の愛に応えることによってもたら されます。聖性とは「自力で偉大な

ことを為し遂げることではありません。そうではなく、その人の人ではなく、その人のですることではなります。聖人は「神が自身のうます」に対した。全ては洗れるような事のとは、そのです」に対した。全てくださっと新しい命を出発点とします。というではないです。というではないです」(ローマ9・16)。

あらゆる聖化の業は神を出発点との業は神が始められたもので、その業は神が始められされたされるでで、このでするとを認識を理るとなるとなるでものではいかではいかではいかではからではいかではありませんがいる。なるなくではないではありませんがいるが起ころうとも私たちに絶えばなくで自分を与え続けてくださいま

す。「わたしたちは自身の働きや努力によってではなく、先に働いてる主の恵みによって義とされるということを教会は繰り返し教えてもいっことを教会は繰り返しわたしたもが自分の行為でもってそれたしたちが自分の行為でもってそれただ関い取ることはできず、それはただ神の先んじる愛のたまものです

(…)。最上のおきてである愛と同様に、この真理はわたしたちの生き方に刻まれるべきものです。それは福音の核心から得られたものであり、わたしたちはそれを知的に理解するだけでなく、感染する喜びへと変えていくように呼ばれているからです」「ISI。

#### スポーツのように

「正に、内的生活はこれに尽きる。 すなわち、始めること、そして、再 び始めること」[17]。このように聖ホ セマリアは言います。それでは具体

的に何から手をつけたら良いので しょうか。たとえば頻繁に現れる自 分の欠点にその手がかりがありま す。それは自分の気質・性格と密接 に関連していることが多いからで す。一例として、ある人が激しい気 質の持ち主の場合、それが粗野な態 度としてしばしば表れるかもしれま せん。または、やさしい性格である 場合、その人の主な欠点は柔弱さと して表れるかもしれません。戦いの 焦点は、第一に神への愛に反するも の、つまり大罪を排斥することから 始まり、その次に心が神と隣人に開 かれることを妨げるもの、すなわち 小罪をしりぞけることに当てられま す。そして最後に愛の欠如や凡庸さ を取り除くことにフォーカスを当て ます。人が生涯をかけて取り組むこ のプロジェクトをフルーエの聖ニコ ラスは次のように祈りとして表現し ています:「主よ、私の神よ、私を あなたから引き離すすべてのものを 取り除いてください。主よ、私の神

よ、私をあなたに近づけるすべてのものを私に与えてください。主よ、私の神よ、私を私自身から解放し、私の全身全霊をあなたに捧げさせてください」[18]。

聖ホセマリアは霊的戦いをスポーツ と比較することを好みました:「修 徳のための戦いとは、否定的なもの でも嫌なものでもなく、喜びに満ち た肯定的な戦いである。スポーツな のだ」「」「」。スポーツには努力が伴い ますが、それは楽しむ空間を生み出 します。他者との交流、新しい経 験、自己超越の喜びなどです。同じ ように、いくらかのトレーニングに よって、霊的戦いにおいて神と共に 過ごすことを〈楽しむ〉ことができ るようになります。このようにし て、客観的な困難において、障害だ けでなく神において新しい命を成長 させる機会を見出すことができま す。困難を挑戦として受け入れるこ とにより、それは単なる「不愉快な もの」ではなくなります。また、周囲の人、特にあまり相性が良くない人への見方も変わるでしょう:「あの人には我慢ならないと言ってはいけない。あの人は私を聖化してくれると考えなさい」[20]。

スポーツのトレーニングにおいては 継続性が鍵です。一日で大きな勝利 は実現しません。時に何度もチャレ ンジする必要があります。「良いス ポーツ選手は諦めない。長期間にわ たりトレーニングに打ち込み、準備 をする。高跳びの選手ならば、何度 も何度も挑戦する上回に、粘り強さと 忍耐を通して向き合う一つ一つの小 さな一歩が大きな成功をもたらしま す。そういった意味で、通常継続的 に向き合う小さく具体的な決心のほ うが、実行を伴わない大きな決心よ りも効果的です。それに加え、霊的 戦いにおいては時間がかかることを 考慮にいれることが重要です。始め ること、そして再び始めること、謙

遜と創造性をもって何度も新たに目標を立てること。神への愛の応答は 人生という時間をかけて目立たない 形で実現していきます。

スポーツと同様に、霊的生活におい て敗北を経験することは〈ゲーム〉 の一部です。「悔い改める一人の罪 人については、悔い改める必要のな い九十九人の正しい人についてより も大きな喜びが天にある」(ルカ 15・7)。ですから主は私たちの一つ 一つの小さな〈再スタート〉を喜ん でくれます。まだ長い道程が残って いると知っていても、何か勝利を経 験したときは立ち止まりそれを喜び 味わいましょう。一歩の前進は神に 感謝し新たな力を得るチャンスで す。また戦いにおいて私たちは一人 ではないことを思い出すことは大切 です。アスリートのように、私たち の周囲には助けてくれる人たちがい ます。神が彼らをそこに〈置かれ た〉のです。彼らが私たちを鍛え成 長させてくれます。信仰における兄弟姉妹、天国の聖人たち、守護の天使そして聖母が私たちを支えています。

[1] カトリック儀式書、幼児洗礼式。

[2] ローマ13・14、ガラテヤ2・20参照。

[3] ベネディクト十六世、2012年6月 11日、Lectio Divina。

[4] 聖ホセマリア『知識の香』144 番。

[5] 聖ホセマリア『知識の香』176 番。

[6] R. ガリグー・ラグランジュ『内 的生活の3時期』(R. Garrigou-

- Lagrange, Las tres edades de la vida interior, Tomo I, p. 184ss) 。
- [7] 聖ホセマリア『拓』864。
- [8] フェルナンド・オカリス、司牧 書簡、2018年1月9日、5番。
- [9] 聖ホセマリア『主との対話』83 番。
- [10] 聖ホセマリア『拓』158番。
- [11] 聖ホセマリア『十字架の道行』 第三留、黙想の栞2番。
- [12] ヨセフ・ラッツィンガー『神の働くままに』オッセルバトーレ・ロマーノ、2002年10月6日。
- [13] R. ガリグー・ラグランジュ『内的生活の3時期』(R. Garrigou-Lagrange, Las tres edades de la vida interior, Tomo I, p. 167)。

[14] 聖ホセマリア、説教メモ(San Josemaría, Apuntes de la predicación (AGP, P10, n. 25), cit. por E. Burkhart y J. López, Vida Cotidiana y santidad en la enseñanza de san Josemaría, Rialp, Madrid 2013, vol. II, p. 295)。

[15] ヨセフ・ラッツィンガー『神の働くままに』オッセルバトーレ・ロマーノ、2002年10月6日。

[16] フランシスコ、使徒的勧告「喜びに喜べ」、52、54、55番。

[17] 聖ホセマリア『道』292番。

[18] 聖ヨハネ・パウロ2世、聖ニコラスの墓の前での祈り、1984年6月14日。

[19] 聖ホセマリア『鍛』169番。

[20] 聖ホセマリア『道』174番。

[21] 聖ホセマリア『主との対話』32 番。

Maria Schörghuber

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/combat-closeness-mission3/(2025/12/17)